JSPS 科研費 25340149
「環境政策におけるコモンズの公共性研究」成果報告書

地域、自然をひらくフットパス





泉　留維　　（専修大学）
嶋田大作　（福岡女子大学）
鈴木龍也　　（龍谷大学）
廣川祐司（北九州市立大学）

目次

はしがき
フットパスとは何か――定義問題から見える日本のフットパスの特徴（鈴木龍也） ……3 頁
フットパスの導入による地域環境資源の利用促進と地域社会に与える効果（廣川祐司） ……10 頁
フットパスにおけるウォーカーの嗜好性について（泉留維） ……16 頁
九州における自然アクセス制度の新展開――九州自然歩道、九州オルレ、
およびフットパスネットワーク九州を事例に（嶋田大作） ……22 頁
フットパスに関係する文献一覧 ……30 頁

はしがき

私たちは、泉留維（専修大学）、嶋田大作（福岡女子大学）、廣川祐司（北九州市立大学）、鈴木龍也(龍谷大学)の 4 人からなる研究グループです。みな自然資源の共同管理制度としてのコモンズに関心を持って研究を進めてきました。里山などの地域の自然資源は、それがどのような所有のもとに置かれていようとも地域の人々の生活に大きな影響を与えるものであり、純粋な私有財産としての所有者のみによる管理ではなく、逆に国や地方公共団体による「官による」上からの管理でもなく、地域の人々が何らかの形で共同で関与する形での管理が求められるものであると考え、研究を行っています。

ここでいう地域住民の共同的な管理、地域社会が中心となっての管理というものは、地域社会のなかに閉じた、孤立した管理ということではありません。地域として自律しつつも、外部との連携や対立を当然に前提とした管理ということにならざるを得ないはずです。どうすれば地域社会の自律性を守りつつ、外部との良好な連携関係を築くことができるのでしょうか。私たちは、地域自然資源の管理における地域と外部との関係について、地域資源が外部者のアクセスに開かれる度合いに着目し、どちらかといえば強い閉鎖性を有する「日本の入会」、そのような閉域としてのコモンズから変遷を遂げ、次第に公衆の利用に広く開かれるようになってきている「イングランドなどのオープンスペースやフットパス」、そして早い時期から法律によって公衆のアクセスを認めてきた「北欧の万人権」を比較することによって、地域自然資源を公衆のアクセスに開くことの意味や開く際に直面する諸問題について考察しようと考え、科学研究費の助成（JSPS 科研費　25340149）を得てこの共同研究を開始しました。

ちょうど共同研究を立ち上げるころに、日本におけるフットパス活動において、地域社会が外部者に地域を開くことを通じて地域の活性化を進め、顕著な成果を上げていることを知り、上記の研究の重要な一環としてフットパスの研究に取り組むこととしました。多くのフットパスを訪問し、また場合によってはフットパス設置の過程に参与しつつ、多くのことを学ばせていただきました。この報告書はその中間報告にあたるものです。まだまとまった結論を得るまでには至っておらず、中途半端な報告しかできませんが、今回、中間市で行われる「フットパス国際シンポジウム&第 4 回 FNQ 九州フットパスのつどい」(11 月 28 日～29 日)においてフットパスに興味を持つ方々の前で報告する機会を与えられましたので、できるだけ有意義な対話を行うべく、そのための素材としてこの報告書を急遽まとめました。今後の研究の糧となるご批判をいただければ幸いです。

最後になりましたが、このような報告の機会を与えていただいた中間市、日本フットパス協会、フットパスネットワーク九州、北九州市立大学の皆さん、そして私たちの調査に貴重な時間を割いていただいた全国のフットパス関係者の皆さんにお礼を申し上げます。有り難うございました。

2015 年 11 月 5 日
科学研究費・基盤研究（C）
「環境政策におけるコモンズの公共性研究」
研究代表者　鈴木龍也

＜フットパスに関係する文献一覧＞

フットパスが日本で知られるようになって 10 年以上たち、日本語で読むことができる関連文献も増えてきています。ここでは、Amazon などのオンライン書店で購入可能な書籍や HP 上で無料閲覧できる論文などを紹介します。

＜オンライン書店などで購入可能な書籍＞

淺川昭一郎編（2007）『北のランドスケープ：保全と創造』環境コミュニケーションズ（所収　小川巖「フットパスは地域を変える：北海道の取り組みから」）。

小川巖（2011）『フットパスに魅せられて：私のフットパス遍歴』エコ・ネットワーク。

小川浩一郎（2013）『北海道フットパスガイド 1』エコ・ネットワーク。

神谷由紀子編著（2014）『フットパスによるまちづくり：地域の小径を楽しみながら歩く』水曜社。

小磯修二・草苅健・関口麻奈美（2014）『コモンズ 地域の再生と創造：北からの共生の思想』北海道大学出版会。

森林環境研究会編『森林環境 2013』森林文化協会（所収　泉留維「地域資源としてのフットパス」）。

地球の歩き方編集室（2010）『フットパス・ベストコース：北海道 I 』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室（2010）『フットパス・ベストコース：首都圏 I 』ダイヤモンド・ビッグ社。

鈴木直次・野口旭編（2012）『変貌する現代国際経済』専修大学出版局（所収　泉留維「土地のアクセス権と自然環境保全：イングランドの歩く権利・アクセス権から考える」）。

畠山武道・土屋俊幸・八巻一成編著（2012）『イギリス国立公園の現状と未来：進化する自然公園制度の確立に向けて』北海道大学出版会

平松紘（1999）『イギリス緑の庶民物語：もうひとつの自然環境保全史』明石書店。

平松紘（2002）『ウォーキング大国イギリス：フットパスを歩きながら自然を楽しむ』明石書店。

北海道新聞社編（2013）『ほっかいどう 100 の道』北海道新聞。

三俣学・菅豊・井上真編著（2010）『ローカル・コモンズの可能性』ミネルヴァ書房（所収　泉留維「里道が担う共的領域：地域資源としてのフットパスの可能性」）。

三俣学編著（2014）『エコロジーとコモンズ：環境ガバナンスと地域自立の思想』晃洋書房（所収　廣川祐司「フットパスの創造とツーリズム：熊本県美里町の地域づくりと生業の可能性」、嶋田大作「新たに創出される開放型コモンズ：カナダ・オンタリオ州のブルース・トレイルを事例に」）。

＜HP 上で無料閲覧できる論文など＞

（閲覧の際は、書誌情報などで検索をかけてください。）

泉留維など（2013）「特集　イギリスの「歩く権利」：パブリック・フットパス」『approach』2013 年秋号、竹中工務店。

小笠原正志・中嶋健（2015）「民間非営利団体が創設し運営管理する済州島周回長距離トレイル「済州オルレ」徒歩旅行ブー

ムの実態」スポーツ産業学研究 25（1）。
小川巖（2007）「歩く文化の国、イギリスのフットパス事情」『開発こうほう』532。
小川巖（2012）「伸びゆく北海道のフットパス：さらなる発展のために」『開発こうほう』582。
小川巖など（2010）「特集　広がれ日本のフットパス」『観光文化』34（1）、日本交通公社。
寺村淳（2015）「フィールドワークの導入プログラムとしてのフットパスの利用に関する研究」『大分大学高等教育開発センター紀要』7。
濱田暁生（2015）「地域の隠れた宝さがしから交流が生まれる：フットパスが拓く可能性」『開発こうほう』621。
平野悠一郎・泉留維（2012）「近年の日本のフットパス事業をめぐる関係構造」『専修人間科学論集：社会学篇』2。
廣川祐司（2015）「フットパスによる地域創生のモデル化の試み：持続可能な発展における「開発」概念の再定位」『千葉大学経済研究』29（4）
宮崎政雄・麻生恵（2004）「多摩丘陵におけるフットパス計画による里山景観保全への取り組み」『ランドスケープ研究』68（2）
吉川敏之・丸山記美雄・熊谷 政行（2013）「北海道のフットパス路面の歩きやすさに関する調査」『寒地土木研究所月報』719。

＜表紙の写真＞
左：熊本県美里町
右：北海道黒松内町
（撮影：鈴木龍也）

＜裏表紙の写真＞
各地のフットパス道標
英語のものは、ステッカーも含め、イングランド、コッツウォルズ
（撮影：廣川祐司）

JSPS 科研費 25340149
「環境政策におけるコモンズの公共性研究」成果報告書
地域、自然をひらくフットパス

2015 年 11 月 28 日発行
著作・編集・発行　泉　留維（専修大学）
嶋田大作（福岡女子大学）
鈴木龍也（龍谷大学）
廣川祐司（北九州市立大学）

連絡先
〒 612-8577　京都市伏見区深草塚本町 67　龍谷大学法学部
鈴木龍也研究室
＊本書は JSPS 科研費　25340149 の助成を受けた研究の成果の一部である。

各地のフットパス道標

















ウォーカー歓迎の店であることを示すステッカー





JSPS 科研費 25340149
「環境政策におけるコモンズの公共性研究」成果報告書
地域、自然をひらくフットパス

「本報告書中、嶋田大作「九州における自然アクセス制度の新展開―九州自然歩道、九州オルレ、およびフットパスネットワーク九州を事例に」については、増補・改訂版を学術誌に投稿予定のため、ここでは概略版に差し替えて公開する。」